

体育授業の好き嫌いと学年からみた劣等コンプレックスの得点比較

當山, 貴弘
九州大学大学院人間環境学府

中須賀, 巧
兵庫教育大学大学院学校教育研究科

杉山, 佳生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/4372016>

出版情報 : 健康科学. 43, pp.71-80, 2021-03-25. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン :
権利関係 :

—原 著—

体育授業の好き嫌いと学年からみた劣等コンプレックスの 得点比較

當山貴弘¹⁾, 中須賀巧²⁾, 杉山佳生^{3)*}

A comparison of inferiority complex score from the viewpoint of grades
and the like or dislike of physical education classes

Takahiro TOYAMA¹⁾, Takumi NAKASUGA²⁾, and Yoshio SUGIYAMA^{3)*}

Abstract

This study aimed to examine the associations among the presence of an inferiority complex regarding physical education classes, the like or dislike of physical education classes, and grades. The survey was administered to first- and third-year junior high school students using items related to their likes and dislikes of physical education classes, along with the Inferiority Complex Scale (as it pertains to physical education classes). A total of 454 junior high school students (213 first-year students and 241 third-year students), who exhibited no gaps in their responses to the questionnaire, were included in the analysis. A two-way analysis of variance test was conducted along the inferiority complex subscale (with the scores of each item treated as a dependent variable), with the students' grade level (first-year, third-year) and likes and dislikes of physical education classes acting as independent variables. The results showed that the first factor of the inferiority complex scale – which focuses on motor skills – mainly affected the students' "like or dislike of physical education classes." Next, psychosocial and physical factors, which cause feelings of inferiority to develop into an inferiority complex, affected the students' "like or dislike of physical education class," along with their "grade level," respectively. These results indicate that the way in which inferiority complexes are held differs depending on a student's like or dislike of physical education classes and grade level.

Key Words: junior high school student, inferiority complex, physical education classes, grade level, like or dislike
(Journal of Health Science, Kyushu University, 43: 71-80, 2021)

1) 九州大学大学院人間環境学府 Graduate School of Human-environment Studies, Kyushu University, Japan.

2) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, Japan.

3) 九州大学大学院人間環境学研究院 Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University, Japan.

*連絡先：九州大学大学院人間環境学研究院 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 Tel&Fax：092-802-5162

*Correspondence to: Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University, 744 Motoooka, Nishi-ku, Fukuoka, Fukuoka 819-0395, Japan.
Tel&Fax: +81-92-802-5162 E-mail: sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

はじめに

体育授業が好きか、または嫌いかといった感情面に着目した分類法は、学習者の体育授業に臨む姿勢や活動意欲などを把握する比較的シンプルな心理指標として、学校体育の現場で広く取り上げられている。対象となるものに「好き」といった快感情を抱いている場合、対象に向かう行動は積極的になるといわれている¹⁰⁾。この視点から見ると、仮に学習者が体育授業を好きだと評価すれば、積極的に活動に取り組むだろうし、嫌いだと評価すれば、活動意欲が低下して活発な取り組みが望めない可能性がある。

体育心理学の研究領域では、体育授業場面における好き嫌いという評価に着目した研究が盛んに行われている。例えば、小学生から高校生までを対象に、体育授業に対する好き嫌いの抱き方によって授業評価がどのように異なるのかについて検討を行った結果、体育授業が好きなのは授業に対して「待ち遠しい教科」「意欲がでる教科」と評価している一方で、嫌いだと回答した者は「待ち遠しくない教科」「不安や心配な教科」と感じていることが報告されている²⁴⁾。また、小学生の体育授業に対する好き嫌いと能力認知(運動・スポーツができるという自己評価)の関係については、体育授業が好きなのは能力認知の得点が高くなることが示されている⁹⁾。さらに、体育授業が好きなのは授業内で楽しさを豊富に経験していることが確認されている²²⁾。これらのことから、体育授業に対する好き嫌いのうち、好きといった評価は、学習者の意欲的な取り組みや肯定的な心理的要因を予測でき、一方で嫌いといった評価は、消極性や否定的な心理的側面を把握する有力な指標になるのではないかと考えられる。すなわち、体育授業好きを育成していくことが大切になるということが改めて理解することができる。

しかし、体育授業が好きと評価する者は、本当に授業の中で積極的かつ意欲的に活動に取り組むのだろうか。体育授業において、運動に対する有能感が低い者は「できない」ことに対して諦めや回避的な行動を取ってストレス反応を上手く処理していたが、一方で運動に対する有能感が高い者は、先述のような運動に対する有能感が低い者の消極的な姿がストレス発生源になっていることが指摘されている¹²⁾。また体育授業に対する愛好度が高い者は、運動に関わる有能感も高いことが確認されている¹³⁾。さらに、体育授業が好きでもストレス状況に対して回避的な対処行動を選択することにより、様々な心理的負担を抱えていることが報告

されている¹⁸⁾。以上のことをまとめると、運動に自信があり、体育授業に好意的な感情を抱いている者においても、授業内でストレスを感じることもあり、そのストレスの対処をあきらめたり、適当にやり過ごしたりすることによってネガティブな心理状態に陥ると考えられる。仮に佐々木¹⁸⁾が指摘するように、体育授業に対して好意的感情を抱く者においても回避的な対処行動を選択することによって、多くの心理的負担を感じるようになるのであれば、その回避的な行動を誘発する心理的要因と体育授業に対する好き嫌いとの関連について検討する必要があると言える。

ところで、人が諦めたり、取り組むべき課題から避けるといった回避的な態度を理解する概念の一つとして劣等コンプレックスがある。劣等コンプレックスとは、問題に対して適切に対応できない、あるいはそのための準備ができていない場面において、成功に向かって踏み出すことよりも自分の活動の範囲を制限することで失敗を回避することである¹⁾。具体的には、「A(劣っていること)があるから課題をしない」というように自らが劣っていることを口実に取り組むべき課題から回避することである²⁾¹¹⁾。劣等コンプレックスを有すると、「自分はだめだ」「自分にはできない」といった考えを持つようになり、状況を改善する努力をしなくなるため、多くの成長する機会を逃すようになるとされている²⁾。また特に10代は、劣等コンプレックスによるネガティブな心理的影響を受けやすいことも指摘されている⁹⁾。佐々木・須甲²¹⁾は、児童・生徒を対象に体育授業における劣等コンプレックスの尺度開発を行った結果、体育授業における劣等コンプレックスが運動技能の低さを理由に学習課題を回避しようとする運動スキル焦点コンプレックス(以下、C-運動スキルと略す)と運動技能の低さを認識させる心理・社会・身体的側面を理由に学習課題を回避しようとする心理社会的及び身体的要因焦点コンプレックス(以下、C-心理・社会・身体要因と略す)から構成されていることを確認している。そして、C-運動スキルとC-心理・社会・身体要因が体育授業への満足感と負の相関があることを報告している。このことは、体育授業において劣等コンプレックスを高く評価することによって授業の中で心理的不適応を引き起こす可能性があることを示唆している。

ところで佐々木¹⁶⁾は、中学生の体育授業における無力的認知・思考に落ちいるストレス因について自由記述を行った結果、1年生は「気温」など学習環境の寒暖状態に対して、3年生は「嫌いな運動・苦手な運動への

取り組み」,「不適切な指導・態度」に関する記述をする者が多いことが確認されている。これは、体育授業の学習環境に慣れていない1年生と一連の体育授業を経験し、学習雰囲気や様子を把握している3年生では、体育授業におけるストレスの発生源に相違があり、ひいては学習活動を妨げる要因が異なることを示唆している。すなわち、体育授業における学習課題の回避理由を把握する劣等コンプレックスにおいても1年生と3年生でその抱き方が異なると考えられる。また、先述したように、体育授業が好きと評価する者においてもストレスを感じる場合には、回避的な態度を示すことを考慮すれば、体育授業好きの中にも劣等コンプレックスを抱く者が存在することが考えられる。

以上のことから、本研究では体育授業に対する好き嫌いとは学年(1年生と3年生)の違いによって、劣等コンプレックスの抱き方がどのように異なるかについて明らかにすることを目的とする。

方法

1. 調査対象及び手続き

調査対象者は、関西地区の中学校2校に在籍する499名(中学1年生237名,中学3年生262名)であった。分析対象は、回答データに欠損があった45名を除いた454名(有効回答率91.0%,平均年齢13.6±1.2歳:男子228名,女子226名)とした。調査は、体育授業時に行われた。

2. 調査期間

調査時期は、2018年9月～10月にかけて実施された。

3. 調査内容

1) フェイスシート

基本属性として学年、学級、年齢、性別について尋ねた。

2) 体育授業に対する好き嫌い

体育授業の好き嫌いについては、4段階の選択肢(「嫌い」、「やや嫌い」、「やや好き」、「好き」)によって回答を求めた。

3) 体育授業における劣等コンプレックス

体育授業における劣等コンプレックスの測定には、佐々木・須甲²⁾が作成した「体育授業における劣等コンプレックス尺度」を使用した。この測定尺度は、2つの下位尺度から構成されている。1つ目の下位尺度は、運動スキルの低さを理由に体育授業に対する態度や能

力の向上にむけた考え方あるいは行動が回避的であることを説明するC-運動スキルである。これは、5つの質問項目(「第1項目:運動がうまくないので、いわれたことができなくても仕方がない」「第2項目:運動に自信がないので、目立たないようにしている」「第3項目:走るのが遅いので、がんばるぞという気持ちになれない」「第4項目:得意な運動やスポーツがないので、成績が良くないのは分かっている」「第10項目:運動が苦手なので、ある程度できればそれで良い)から構成されている。C-運動スキル得点が高くなると体育授業において運動技能を理由に学習課題を回避する傾向があると考えられる。2つ目の下位尺度は、運動スキルの劣等性を認識させる心理社会的及び身体的要因を理由に回避的な態度や行動を説明するC-心理・社会・身体要因である。これは、6つの質問項目(「第5項目:できないことができるようになった経験が少ないので、やる気がでない」「第6項目:仲間から笑われるので、自分から練習しようとなない」「第7項目:運動能力が低いので、体育の授業には一生懸命になれない」「第8項目:「おそい」とか「へた」などと言われるので、意欲がない」「第9項目:気が小さいので、思い切ってチャレンジできない」「第11項目:からだが強くないので、思い切り動けなくても仕方がない)から構成されている。C-心理・社会・身体要因得点が高くなると、体育授業において心理・社会・身体的側面を理由に学習課題を回避する傾向があると考えられる。本研究の分析では、2つの下位尺度得点と各質問項目の得点を用いることとした。項目への回答は、「よくあてはまる」(5点)から「ほとんどあてはまらない」(1点)の5件法であった。

4. 倫理的配慮

本研究では、学校長の許可を得た後に保健体育科教員に調査を依頼した。そして今回の調査は、体育授業における劣等コンプレックスや体育授業の好き嫌いに特化しており、また個人情報等について記入しない調査だったこともあり保護者の同意等について不要であると研究代表者と研究協力者によって判断された。倫理的配慮として、調査開始時に担当教員から本調査が強制的なものではないこと、中断しても回答者に不利益が生じることがないことが説明された。また、調査票の表紙には、調査がテストでないこと、学校の成績と関係ないこと、得られたデータの秘密が守られることが明記された。記入済みの調査票は、研究代表者あるいは研究協力者が調査協力校を訪問し、手渡しによる回収を

行った。なお、データ入力時には個人情報特定されないID番号が用いられた。

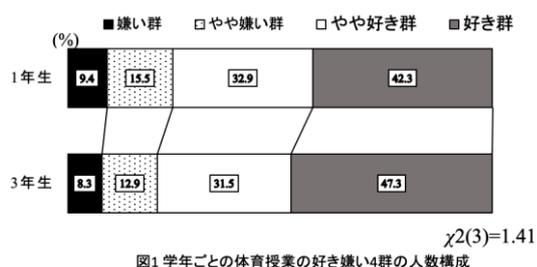
5. 統計解析

分析に先立ち、各学年（1年生と3年生）における体育授業に対する好き嫌い4群の割合について χ^2 検定を行った。そして、体育授業における劣等コンプレックスへの影響要因を検討するために、体育授業の好き嫌い4群と学年（1年生と3年生）を要因とする二要因分散分析を行った。なお、交互作用が有意であった場合には単純主効果の検定、主効果が有意であった場合にはTukeyによる多重比較の検定を行うこととした。分析には統計パッケージのIBM SPSS Statistics22.0を使用し、有意水準は5%とした。

結果

1. 体育授業に対する好き嫌い4群における学年（1年生と3年生）ごとの人数構成

1年生と3年生において体育授業に対する好き嫌いの項目を基に、4つの群を構成した（「嫌い群」、「やや嫌い群」、「やや好き群」、「好き群」）。そして、体育授業に対する好き嫌い4群は、1年生と3年生で人数構成の割合に相違がみられるのかを確認するために、 χ^2 検定を実施した結果（図1）、有意差が認められなかった。このことから、体育授業の好き嫌い4群における人数割合は、1年生と3年生で同程度であることが示唆された。



2. 体育授業に対する好き嫌いと学年（1年生と3年生）からみた劣等コンプレックス得点の比較

「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」のC-運動スキル得点とC-心理・社会・身体要因得点そして、それらの下位質問項目の基本統計量（平均値、標準偏差）を算出した。この得点を従属変数とし、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」を独立変数とした二元配置分散分析を実施した。分析の結果は、表1と表2に示す通りである。なお、下位尺度得点の結果は、体育授業に対す

る好き嫌いと学年（1年生と3年生）からみたC-運動スキル及び各質問項目の得点比較、体育授業に対する好き嫌いと学年（1年生と3年生）からみたC-心理・社会・身体要因及び各質問項目の得点比較の順で述べることとする。

1) 体育授業に対する好き嫌いと学年（1年生と3年生）からみたC-運動スキルの得点比較

まず、C-運動スキル得点の「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」における二元配置分散分析を行った。その結果、C-運動スキル得点は、「体育授業の好き嫌い4群」の主効果が認められた（ $F(3, 454) = 54.06, p < .05$ ）。具体的には、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「やや好き群」、「好き群」よりも有意に高い得点を示した。また「やや好き群」は、「好き群」よりも得点が高かった。

2) C-運動スキルの各質問項目における得点比較

次に、C-運動スキルを構成する各質問項目の得点を「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」における二要因分散分析を行った。その結果、「第1項目：運動がうまくないので、いわれたことができなくても仕方がない」（ $F(3, 454) = 17.86, p < .05$ ）、「第3項目：走るのが遅いので、がんばるぞという気持ちになれない」（ $F(3, 454) = 37.54, p < .05$ ）、「第4項目：得意な運動やスポーツがないので、いわれたことができなくても仕方がない」（ $F(3, 454) = 35.16, p < .05$ ）、「第10項目：運動が苦手なので、ある程度できればそれで良い」（ $F(3, 454) = 51.64, p < .05$ ）において「体育授業の好き嫌い4群」の主効果が認められた。4つの項目ともに群間差のパターンは、同様の傾向を示した。具体的には、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「やや好き群」、「好き群」よりも有意に高い得点であった。また「やや好き群」は、「好き群」よりも得点が有意に高かった。「第2項目：運動に自信がないので、目立たないようにしている」においては、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」の交互作用が認められた（ $F(3, 454) = 2.79, p < .05$ ）。そこで、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに単純主効果の検定を行った結果、1年生において「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」は、「好き群」よりも有意に得点が高いことが示された。また「嫌い群」は、「やや好き群」よりも有意に高い得点を示した（ $F(3, 454) = 27.98, p < .05$ ）。一方、3年生においては、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「好き群」よりも有意に得点が高いことが示された。また「やや嫌い群」は、「やや好き群」よりも有意に得点が高かった（ $F(3, 454) = 12.68, p < .05$ ）。さらに「好き群」では、3年生が1年生よりも有意に得

表1 体育授業の好き嫌い4群と学年におけるC-運動スキルの得点及び質問項目の得点比較

	1年生 (n=213)				3年生 (n=241)				交互作用	好き嫌い4群 主効果	学年 主効果
	嫌い群 (n=20)	やや嫌い群 (n=33)	やや好き群 (n=70)	好き群 (n=90)	嫌い群 (n=20)	やや嫌い群 (n=31)	やや好き群 (n=76)	好き群 (n=114)			
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)			
C-運動スキル	18.50 (4.49)	17.09 (4.85)	13.96 (4.55)	9.84 (4.38)	18.25 (4.29)	17.68 (3.31)	14.57 (3.74)	12.25 (4.98)	1.88	54.06*	2.72
1.運動がうまくないので、いわれたことができなくても仕方ない。	3.50 (1.28)	3.27 (1.23)	2.79 (1.09)	2.27 (1.15)	3.50 (1.15)	3.61 (.96)	2.99 (.96)	2.71 (1.14)	.63	17.86*	3.77
2.運動に自信がないので、目立たないようにしている。	3.65 (1.31)	3.45 (1.18)	2.87 (1.23)	1.91 (1.04)	3.45 (1.00)	3.61 (.88)	2.84 (.85)	2.46 (1.06)	2.79*	38.91*	.96
3.走るのが遅いので、がんばるぞという気持ちになれない。	3.70 (1.13)	3.36 (1.14)	2.54 (1.19)	1.88 (1.08)	3.65 (.81)	3.19 (1.05)	2.72 (1.05)	2.25 (1.07)	1.25	37.54*	.46
4.得意な運動やスポーツがないので、成績が良くないのは分かっている。	3.70 (1.38)	3.55 (1.09)	2.90 (1.21)	2.03 (1.10)	3.85 (.88)	3.58 (.96)	3.08 (.94)	2.56 (1.21)	1.20	35.16*	3.06
5.運動が苦手なので、ある程度できればそれで良い。	3.95 (1.32)	3.45 (1.03)	2.86 (1.25)	1.76 (1.05)	3.80 (1.15)	3.68 (1.01)	2.93 (1.11)	2.27 (1.20)	1.58	51.64*	1.61

* $p<.05$

点が高いことが示された ($F(1, 454) = 13.37, p < .05$)。

3) 体育授業に対する好き嫌いとは学年 (1年生と3年生) からみたC-心理・社会・身体要因の得点比較

続いて、C-心理・社会・身体要因の「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」における二元配置分散分析を行った。その結果、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに主効果が認められた。具体的には、「体育授業の好き嫌い4群」において「嫌い群」と「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも有意に得点が高かった。また「やや好き群」は、「好き群」よりも高い得点を示した ($F(3, 454) = 27.66, p < .05$)。さらに「学年」において3年生は、1年生よりも有意に高い得点を示した ($F(1, 454) = 14.26, p < .05$)。

4) C-心理・社会・身体要因の各質問項目における得点比較

C-心理・社会・身体要因を構成する各質問項目の得点を「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」における二元配置分散分析を行った結果、「第5項目：できないことができるようになった経験が少ないので、やる気がでない」、「第6項目：仲間から笑われるので、自分から練習しようとしめない」、「第7項目：運動能力が低いので、体育の授業には一生懸命になれない」、「第8項目：「おそい」とか「へた」などと言われるので、意欲がでない」、「第11項目：からだが強くないので、思い切り動けなくても仕方がない」において「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに主効果が認められた。なお「体育授業の好き嫌い4群」においては、第5項目 ($F(3, 454) = 26.26, p < .05$)、第7項目 ($F(3, 454) = 35.54, p < .05$) 及び第11項目 ($F(3, 454) = 15.85, p < .05$) で群間差のパターンが同様の傾向を示した。具体的には、「嫌い群」と「やや嫌い群」は「やや好き群」、「好き群」よりも有意に得点が高いことを示した。「やや好き群」は、「好き群」よりも高い得点を示した。次に第6項目については、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「好き群」よりも有意に高い得点を示した。また「やや嫌い群」は、

「やや好き群」よりも得点が有意に高かった ($F(3, 454) = 10.48, p < .05$)。さらに第8項目については、「やや嫌い群」が「やや好き群」と「好き群」よりも有意に得点が高かった ($F(3, 454) = 8.58, p < .05$)。「学年」の主効果については、5つの項目 (第5項目、第6項目、第7項目、第8項目、第11項目) とともに同様のパターンを示した。具体的には、3年生が1年生よりも有意に高い得点を示した (第5項目： $F(1, 454) = 10.03, p < .05$ 、第6項目： $F(1, 454) = 15.45, p < .05$ 、第7項目： $F(1, 454) = 8.27, p < .05$ 、第8項目： $F(1, 454) = 14.28, p < .05$ 、第11項目： $F(1, 454) = 8.56, p < .05$)。

「第9項目：気が小さいので、思い切ってチャレンジできない」については、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」の交互作用が認められた ($F(3, 454) = 3.91, p < .05$)。「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに単純主効果の検定を行ったところ、1年生において「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」は、「好き群」よりも有意に高い得点を示した ($F(3, 454) = 16.94, p < .05$)。一方、3年生において「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも得点が有意に高かった ($F(3, 454) = 5.65, p < .05$)。また「好き群」では、3年生が1年生よりも有意に高い得点を示した ($F(1, 454) = 17.98, p < .05$)。

考察

本研究の目的は、体育授業に対する好き嫌いとは学年 (1年生と3年生) の違いによって劣等コンプレックスの抱き方がどのように異なるのかについて明らかにすることであった。体育授業に対する好き嫌いの項目を基に、4つの群を構成し、これら4群間と学年 (1年生と3年生) における劣等コンプレックスの得点を二元配置分散分析により比較検討を行った。本研究で得られた結果をもとに、C-運動スキル及び第1項目、第3項目、第4項目、第10項目の得点差にみられる特徴、第2項目の得点差にみられる特徴、C-心理・社会・身体要

表2 体育授業の好き嫌い4群と学年におけるC-心理・社会・身体要因得点及び質問項目の得点比較

質問項目	1年生 (n=213)				3年生 (n=241)				交互作用	好き嫌い4群主効果	学年主効果
	嫌い群 (n=20)	やや嫌い群 (n=33)	やや好き群 (n=70)	好き群 (n=90)	嫌い群 (n=20)	やや嫌い群 (n=31)	やや好き群 (n=76)	好き群 (n=114)			
	平均値 (標準偏差)										
C-心理・社会・身体要因	17.05 (5.20)	15.58 (4.27)	13.29 (5.07)	10.01 (5.07)	18.85 (3.48)	18.35 (4.01)	14.58 (4.79)	13.22 (6.45)	1.01	27.66*	14.26*
6. できないことができるようになった経験が少ないので、やる気がでない。	3.30 (1.26)	2.88 (1.27)	2.33 (1.11)	1.80 (1.06)	3.60 (.88)	3.29 (.90)	2.59 (.90)	2.39 (1.15)	.69	26.26*	10.03*
7. 仲間に笑われるので、自分から練習しようとしな。	2.25 (1.33)	2.36 (1.06)	2.09 (1.10)	1.67 (.92)	2.95 (.95)	2.87 (.81)	2.29 (.92)	2.14 (1.19)	.84	10.48*	15.45*
8. 運動能力が低いので、体育の授業には一生懸命になれない。	3.25 (1.33)	2.76 (1.09)	2.19 (1.04)	1.58 (.96)	3.50 (.95)	3.16 (1.04)	2.43 (.96)	2.07 (1.17)	.43	35.54*	8.27*
9. 「おせい」とか「へた」などと言われるので、意欲がでない。	2.10 (1.25)	2.27 (1.07)	1.99 (1.19)	1.60 (1.00)	2.50 (1.15)	2.94 (.96)	2.33 (.97)	2.10 (1.20)	.35	8.58*	14.28*
10. 気が小さいので、思い切ってチャレンジできない。	3.35 (1.50)	2.76 (1.12)	2.59 (1.31)	1.68 (1.02)	3.10 (1.33)	3.23 (.96)	2.53 (.95)	2.38 (1.29)	3.91*	19.57*	2.57*
11. からだが強くないので、思い切り動けなくても仕方がない。	2.80 (1.51)	2.55 (1.06)	2.11 (1.03)	1.69 (.97)	3.20 (1.20)	2.87 (.99)	2.41 (1.06)	2.15 (1.21)	.18	15.85*	8.56*

*p<.05

因及び第5項目、第7項目、第11項目の得点差にみられる特徴、第6項目と第8項目の得点差にみられる特徴、第9項目の得点差にみられる特徴についての順に述べることとする。

C-運動スキル及び第1項目、第3項目、第4項目、第10項目の得点差にみられる特徴

C-運動スキル及び第1項目(運動がうまくないので、いわれたことができなくても仕方がない)、第3項目(走るのが遅いので、がんばるぞという気持ちになれない)、第4項目(得意な運動やスポーツがないので、成績が良くないのは分かっている)、第10項目(運動が苦手なので、ある程度できればそれで良い)において、「体育授業の好き嫌い4群」に主効果が認められた。具体的には、「嫌い群」と「やや嫌い群」は「やや好き群」、「好き群」よりも高い得点を示した。これは、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「やや好き群」、「好き群」よりも授業の中で運動技能の低さ(特に、運動がうまくない、走るのが遅い、得意な運動やスポーツがない、運動が苦手など)を理由に学習課題を回避する傾向にあることを示唆している。体育授業に対する好意度が高い者ほど能力認知得点(運動・スポーツができるという自己評価得点)が高いことが確認されている⁵⁾。そのため、「やや好き群」と「好き群」は、運動・スポーツができると認知しており、運動スキルに対する劣等コンプレックスも低くなるのではないかと考えられる。一方、体育授業嫌いの大きな要因として運動能力が低位であることの自覚が示されており⁸⁾、体育授業において「嫌い群」と「やや嫌い群」は能力が低いと感じている可能性がある。そのため、これ以上自分の能力が低いことを認知したくないあるいはされたくないと考え、学習課題に対して回避的な取り組みをするのではないかと推察される。また「やや好き群」は、「好き群」よりもC-運動スキル及び第1項目(運動がうまくないので、いわれた

ことができなくても仕方がない)、第3項目(走るのが遅いので、がんばるぞという気持ちになれない)、第4項目(得意な運動やスポーツがないので、成績が良くないのは分かっている)、第10項目(運動が苦手なので、ある程度できればそれで良い)が高い得点を示した。これは、体育授業がやや好きだと評価する者は、好きと評価する者よりも運動技能の低さを理由に学習課題を回避する傾向があることを意味している。先述したように、体育授業に対する好意度が高い者ほど能力認知得点が高い⁵⁾のであれば、「やや好き群」は「好き群」よりも運動技能の低さを認知している可能性があり、それによって学習課題を回避する機会も増えるのではないかと考えられる。

第2項目の得点差にみられる特徴

「第2項目:運動に自信がないので、目立たないようにしている」において、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」で交互作用が認められた。具体的には、1年生において「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」は、「好き群」よりも有意に高い得点を示した。また、3年生においては、「嫌い群」が「好き群」よりも高い得点を示し、「やや嫌い群」が「やや好き群」と「好き群」よりも得点が高かった。ここで注目する点として、1年生においては「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」の得点が同程度だったのに対し、3年生になると「やや嫌い群」が「やや好き群」よりも得点が高くなる傾向を示したことである。これは、「やや嫌い群」が学年の進行に伴って、運動に対する自信の低さを理由に学習課題を回避する傾向にあることを示唆している。体育授業が少し嫌いな者は、運動課題への成功経験を味わうことで運動の楽しさと感じるとされている⁹⁾。一方で、年齢の増加に伴い、運動に対する有能感は抱きにくくなることが確認されている¹⁵⁾。この背景一つとして、運動種目の高度化が考えられる。すなわち、学年

が進行するにつれて、運動種目の専門性が高まることで、成功経験をj得る機会が減少し、次第に運動に対する有能感も低下していくことが考えられる。そのため、「やや嫌い群」においても高学年になるほど、成功経験に基づいた有能感の獲得が難しくなり、次第に学習課題を回避するようになるのではないかと推察される。また、「好き群」において3年生は1年生よりも得点が高いことが示された。これは、体育授業好きにおいても学年が進むにつれて、運動に対する自信の低さを理由に学習課題を回避する傾向があることを意味している。スポーツ場面において、あえて自分に不利益な行動を選択し、失敗の言い訳や自尊心の維持に努めようとするセルフ・ハンディキャッピング⁷⁾ (以下、SH 方略) は、中学1年生と2年生では男子よりも女子の得点が高いのに対し、3年生になると女子よりも男子の方が高い得点を示すことが報告されている⁴⁾。また男子は、女子よりも運動有能感の統制感や身体的有能さの認知が高いことが確認されている¹⁴⁾。これらのことは、特に中学校3年生においては運動技能に自信のある者でも失敗の回避や自尊心を守るためにSH方略のような不適切な行動を選択する可能性があることを示唆している。そして、3年生においては体育授業好きで運動技能に自信があったとしてもSH方略を選択することで、適切な指導が受けられなくなり、技能の上達が見込めなくなるのではないかと考えられる。そして、次第に運動に対する自信も低下し、最終的にはその自信の低さを理由に学習課題を回避するようになると考えられる。

C-心理・社会・身体要因及び第5項目、第7項目、第11項目の得点差にみられる特徴

C-心理・社会・身体要因得点及び第5項目(できないことができるようになった経験が少ないので、やる気がでない)、第7項目(運動能力が低いので、体育の授業には一生懸命になれない)、第11項目(からだが強くないので、思い切り動けなくても仕方がない)においては、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに主効果が認められた。「体育授業の好き嫌い4群」において「嫌い群」と「やや嫌い群」は、「やや好き群」、「好き群」よりも有意に得点が高かった。これは、体育授業に対して「嫌い群」と「やや嫌い群」は、「やや好き群」、「好き群」よりも運動技能以外(心理・社会・身体的側面)の要因を理由に学習課題を回避する傾向があることを示唆している。具体的には、授業の中で運動技能の低さを認知してしまうこと(例:できないことが

できるようになった経験が少ない、運動能力が低い)や明らかな力の差がわかってしまうこと(例:からだが強くない)などが理由となり、積極的に課題には取り組まないでおこうと判断してしまう傾向があることを意味している。体育授業嫌いは、運動課題ができなかったという事実から運動能力が低いと認知する傾向がある⁸⁾。また体育授業が嫌いな者は好きな者と比べて、授業内容や対人関係に対して不満を感じており、その背景にはみんなの前で比較されたり、失敗を責められたりした経験が挙げられている²²⁾。このことから、体育授業が嫌いな者は周囲から批判を浴びるのではないかと恐怖心を抱き、それによって劣等コンプレックスが高まっている可能性がある。また「やや好き群」は、「好き群」よりもC-心理・社会・身体要因得点及び第5項目(できないことができるようになった経験が少ないので、やる気がでない)、第7項目(運動能力が低いので、体育の授業には一生懸命になれない)、第11項目(からだが強くないので、思い切り動けなくても仕方がない)の得点が有意に高かった。体育授業を楽しいと回答する者は、学習課題ができない場面において諦めず慎重に対処する一方で、やや楽しいと回答する者は慎重に対処もするが諦めもするとされている¹⁷⁾。これは、「やや好き群」においても、失敗する可能性のある課題においては、あえて取り組まないといった行動を選択することが考えられる。また、運動技能の低さを理由に回避してしまうことは、かえって運動技能への自信を低下させることにつながるため、それとは別な要因(できることができるようになった経験が少ない、運動能力が低い、からだが強くない)を理由にして学習課題を避けようとしているのではないかと推察される。さらに、C-心理・社会・身体要因及びその下位項目(第5項目、第7項目、第11項目)において3年生は、1年生よりも有意に得点が高いことが示された。青年期になると、自己基準に基づく個人の熟達度によって有能性の向上を判断できるようになるとされている²³⁾。つまり、自己の運動能力に対する有能さに満足していれば、失敗の可能性のある課題にはあえて取り組む必要はないと考え、回避的行動を示す可能性がある推察される。そのため、1年生よりも心理的に発達している3年生においては、体育授業において自己の運動能力や身体の未熟さを強く感じた場合、課題に失敗して有能さを失わないために経験の不足や運動能力の低さ、身体的なハンディキャップなどを理由にして課題に取り組まないといった選択をするのではないかと推察され

る。

第6項目と第8項目の得点差にみられる特徴

C-心理・社会・身体要因の下位項目である第6項目(仲間笑われるので、自分から練習しようとしなくて)と第8項目(「おそい」とか「へた」などと言われるので、意欲がでない)において「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに主効果が認められた。「体育授業の好き嫌い4群」において、第6項目と第8項目ともに「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも有意に高い得点であった。また、第6項目においては「嫌い群」が「好き群」よりも有意に得点が高かった。このことは、「嫌い群」と「やや嫌い群」は、仲間笑われることや周囲からの運動技能に対するネガティブな発言(「おそい」とか「へた」など)によって回避的な行動を示す傾向があることを示唆している。運動に対する自信が高い者は、運動に対して自信が低い者の消極的な姿がストレス発生源になっていることが指摘されている¹²⁾。このように運動に対する自信が高い者は、自信が低い者の不真面目な行動にストレスを感じており、そのストレスを分散するために自分よりも運動技能が低い者を嘲笑ったり、「おそい」とか「へた」といったネガティブな発言を気づかない間に発信している可能性がある。そして、そのようなネガティブな発言を受けた者は、活動への取り組みが委縮し、その先の積極的な活動が望めない状況に追いやられてしまうのではないかと考えられる。

第9項目の得点差にみられる特徴

C-心理・社会・身体要因の下位項目である第9項目(気が小さいので、思い切ってチャレンジできない)において「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」における交互作用が認められた。具体的には、1年生において「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」は、「好き群」よりも有意に高い得点であった。また、3年生において「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも得点が高かった。さらに「好き群」においては、3年生が1年生よりも得点が高かった。体育授業に適応するためには、授業に取り組む仲間との人間関係にも適応しなければならないことが指摘されている¹⁹⁾。一方、岡澤・辻¹⁵⁾によれば、周囲から受け入れられるといった受容感、加齢と共に低下することが報告されており、体育授業においては学年が進むにつれて良好な対人関係を築くことが困難になることが示されている。

また、このような対人関係のストレス場面において、1年生は自己主張することで対処するのに対して、3年生は受け流すといった対処行動を選択する傾向があることが指摘されている²⁰⁾。つまり3年生では、授業の中で対人関係に不満を感じていたとしても、その原因を積極的に対処していくのではなく、自己解決することで受け流すといった対処行動を選択していることが考えられる。そして、自己解決をする過程で、対人関係を良好に築けない問題(例:気が弱いなど)が自分にもあると結論づけていくことで、体育授業が好きであっても、どうせ授業に取り組んでも仲間と上手くやれないと考えるようになり、回避的な態度を示すようになるのではないかと推察される。

まとめ

本研究の目的は、体育授業に対する好き嫌いと学年の違いによって劣等コンプレックスの抱き方がどのように異なるかについて明らかにすることであった。体育授業に対する好き嫌いの4群(「嫌い群」「やや嫌い群」「やや好き群」「好き群」と学年(1年生と3年生)における劣等コンプレックスの得点について二元配置分散分析を行った。その結果については、以下5点に集約できる。

- ① C-運動スキル及びその下位項目である第1項目(運動がうまくないので、いわれたことができなくても仕方がない)、第3項目(走るのが遅いので、がんばるぞという気持ちになれない)、第4項目(得意な運動やスポーツがないので、成績が良くないのは分かっている)、第10項目(運動が苦手なので、ある程度できればそれで良い)において、「体育授業の好き嫌い4群」に主効果が有意であった。具体的には、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「やや好き群」、「好き群」よりも高い得点を示した。また、「やや好き群」は「好き群」よりも得点が高かった。
- ② C-運動スキルの下位項目である第2項目(運動に自信がないので、目立たないようにしている)において、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」で交互作用が認められた。具体的には、1年生において「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」が「好き群」よりも有意に高い得点を示した。3年生においては、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「好き群」よりも得点が高かった。また「やや嫌い群」は、「やや好き群」よりも有意に高い得点を示した。

さらに、3年生は1年生よりも得点が高かった。

- ③ C-心理・社会・身体要因得点及びその下位項目である第5項目（できないことができるようになった経験が少ないので、やる気がでない）、第7項目（運動能力が低いので、体育の授業には一生懸命になれない）、第11項目（からだが強くないので、思い切り動けなくても仕方がない）においては、「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」それぞれに主効果が有意であった。具体的には、「嫌い群」と「やや嫌い群」が「やや好き群」、「好き群」よりも有意に得点が高かった。また「やや好き群」は、「好き群」よりも高い得点を示した。「学年」については、3年生が1年生よりも有意に得点が高かった。
- ④ C-心理・社会・身体要因の下位項目である第6項目（仲間に笑われるので、自分から練習しようとしなくて）と第8項目（「おそい」とか「へた」などと言われるので、意欲がでない）において「体育授業の好き嫌い4群」、「学年」それぞれに主効果が認められた。まず、第7項目と第9項目ともに「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも有意に高い得点であった。また、第7項目において「嫌い群」は、「好き群」よりも有意に得点が高かった。「学年」については、3年生が1年生よりも有意に得点が高かった。
- ⑤ C-心理・社会・身体要因の下位項目である第9項目（気が小さいので、思い切ってチャレンジできない）において「体育授業の好き嫌い4群」と「学年」における交互作用が認められた。具体的には、1年生において「嫌い群」、「やや嫌い群」及び「やや好き群」が「好き群」よりも有意に高い得点であった。また3年生において「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも得点が高かった。さらに、「好き群」において3年生は1年生よりも有意に高い得点を示した。

これらを総合的にみると、「嫌い群」と「やや嫌い群」は、「やや好き群」と「好き群」よりも体育授業における劣等コンプレックスの得点が高い傾向にあるといえる。また、3年生は1年生よりも体育授業における劣等コンプレックスの得点が高いことも示唆された。

引用文献

- 1) Adler, A. (1932): Feelings of Inferiority and Superiority, What Life Should Mean To You. Bishop&Sons, LTD. pp. 49-70.
- 2) アドラー：岸見一郎訳(2016): 第1章失われた勇気。勇気はいかに回復されるのか。アルテ, pp. 11-45.
- 3) 古庄高(2013): 第三章 子どもの理解。家庭学校に活かすアドラー心理学。二瓶社, pp. 85-141.
- 4) 遠藤俊郎・袴田敦士・布施洋・安田貢・伊藤潤二(2009): 中学生のスポーツ活動におけるセルフ・ハンディキャッピングの関連性。山梨大学教育人間科学部紀要, 11(18): 126-133.
- 5) 長谷川悦示・滝川孝八・鈴木武文・下田和史(1999): 小学校の体育授業における目標志向性。群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 34: 175-187.
- 6) 東健司・春日晃章・中野貴博・曾我部宗(2018): 小学校高学年児童における運動の楽しさ：体育嫌いな児童に着目して。岐阜大学教育学部研究報告書（自然科学）, 42: 77-82.
- 7) 伊藤豊彦(2012): セルフ・ハンディキャッピングなぜやる気を出さないのか。よくわかるスポーツ心理学。ミネルヴァ書房, pp. 88-89.
- 8) 叶俊文(1993): 体育における動機づけに関する検討—体育嫌いから変容するための要因について—。皇学館大学紀要, 31: 221-242.
- 9) Kabir, S. M. S. and Rashid, U. K. (2017): Interpersonal values, inferiority complex and psychological well-being teenage students. Jagannath University Journal of Life and Earth Sciences, 3(1&2): 127-135.
- 10) 三木ひろみ(2002): 「好き」と「嫌い」の心理学。体育科教育, (50) 3: pp. 18-21.
- 11) 野田俊作(1997): 劣等感をもつ子の行動と心理。児童心理, 51: 577-585.
- 12) 小畑治(2018): 体育授業におけるストレスへのアプローチ。体育科教育, (66) 2: pp. 46-50.
- 13) 岡澤祥訓(1996): 身体的有能感と運動種目の達成との関係—小学校児童を対象にして—。Proceedings of 2nd Tukuba International Workshop on Sport Education, 67-73.
- 14) 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996): 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究。スポーツ教育学研究, 16(2): 145-155.
- 15) 岡澤祥訓・辻朋枝(1998): 運動有能感の発達傾向に関して。体育科教育, (46) 9: pp. 54-56.
- 16) 佐々木万丈(1996): 中学校体育の授業における生徒の心理的ストレスと学習条件—無力的認知・思考

- を生起させるストレス因の分析を通して-。東北体育学研究, 14: 61-73.
- 17) 佐々木万丈(1998): 体育学習の心理的ストレスに対するコーピング-中学生の場合-。スポーツ心理学研究, 25(1): 75-82.
- 18) 佐々木万丈(1999): 体育学習における能力的不適応経験時のコーピングと心理的ストレス反応の関係: 中学生の場合。体育学研究, 44: 445-456.
- 19) 佐々木万丈(2003): 体育の授業に対する適応: 中学生の場合。体育学研究, 48: 153-167.
- 20) 佐々木万丈(2007): 体育授業中の友人ストレスとコーピング。体育学研究, 52: 453-463.
- 21) 佐々木万丈・須甲理生(2016): 体育授業に対する劣等コンプレックスの因子的概念と児童生徒の主体的要因との関連。体育学研究, 61: 663-680.
- 22) 渋谷崇行・小泉昌幸・伊藤巨志(1998): 体育授業経験が体育授業・スポーツ実施の愛好度に及ぼす影響-楽しさ体験の視点から-。新潟工科大学紀要, 3: 149-158.
- 23) 杉山佳生(2013): 第7章 ジュニアスポーツと動機づけ。西田保編, スポーツモチベーション。大修館書店, pp. 106-117.
- 24) 米川直樹(2003): 特集 運動好きを育てる 体育授業の好感度。体育の科学, 53(12): 921-924.